

ねぎ(秋冬どり)のさび病、葉枯病・黒斑病の発生が多い ～ 早期の防除で被害の拡大を防止しましょう ～

1. 現在までの発生状況と今後の発生予想

8月4半旬の巡回調査（全県10地点）におけるさび病の発病株率は13.9%（平年2.1%）、葉枯病・黒斑病の発病株率は13.5%（平年6.8%）でいずれも高かった（図-1、2）。

8月20日に仙台管区气象台から発表された東北地方1か月予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予報されているが、例年8月下旬以降はさび病、葉枯病・黒斑病の感染、発病の好適気象条件になるため、被害拡大が懸念される。

2. 防除対策

さび病

- ア、夏どりねぎの被害残さはほ場で処分する。
- イ、適正な肥培管理を行う。
- ウ、発病が多くなってからでは防除効果が劣るため、発病初期から薬剤散布する(表-1)。

葉枯病・黒斑病

- ア、適正な肥培管理を行う。
 - イ、降雨が続くと発病しやすいので予防や発病初期の防除を行う。
 - ウ、発病程度が大きい場合は、生葉数が減少し、収量(太り)への影響が懸念されるため注意する。
 - エ、べと病やさび病の病斑や害虫の食害痕に二次感染するケースが多いため、それらの防除も行う。
- また、葉枯病が原因となる黄色斑紋病斑は収穫物の品質低下を招くことが多いため、9月上旬～10月上旬に約10日間隔で重点的に薬剤散布する(表-1)。

3. 資料

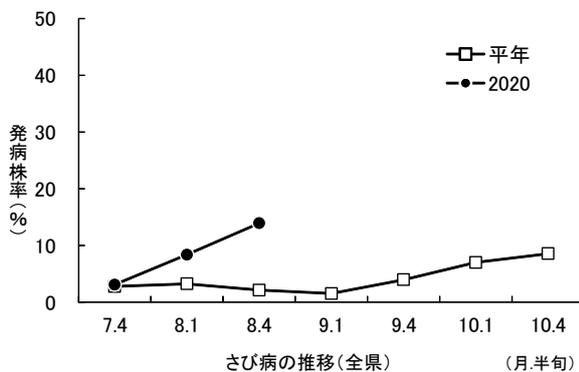


図-1 巡回調査におけるさび病の発病株率の推移

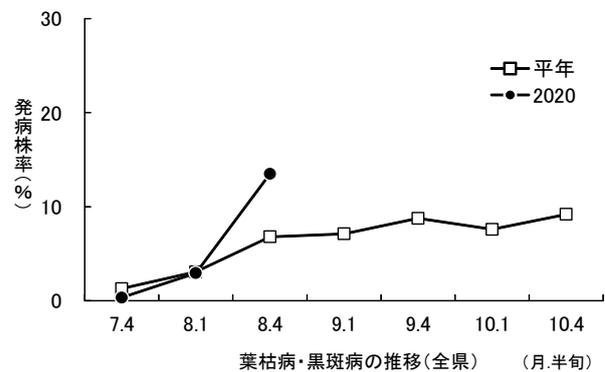


図-2 巡回調査における葉枯病・黒斑病の発病株率の推移

表－1 ねぎのさび病、黒斑病・葉枯病の防除薬剤

分類	農薬名	希釈倍数[散布液量]	使用時期	本剤の使用回数	各成分の 総使用回数	さび病	黒斑病	葉枯病
S	アミスター20フロアブル	2,000倍[100～300L/10a]	収穫3日前まで	4回以内	5回以内 ^{*1}	○	○	○
K	オンリーワンフロアブル	1,000倍[150～300L/10a]	収穫14日前まで	3回以内	3回以内	○		
B	ジマンダイセン水和剤	600倍[100～300L/10a]	収穫14日前まで	3回以内	ア	○	○	
S	ストロビーフロアブル	2,000倍[100～300L/10a]	収穫7日前まで	3回以内	3回以内	○	○	
E	ダコニール1000	1,000倍[100～300L/10a]	収穫14日前まで	3回以内	4回以内 ^{*2}		○	○
B・K	テーク水和剤	600倍[100～300L/10a]	収穫14日前まで	3回以内	アイ	○	○	○
J	パレード20フロアブル	2,000～4,000倍[100～300L/10a]	収穫前日まで	3回以内	3回以内		○	○
B	ペンコゼブフロアブル	500～600倍[150～300L/10a]	収穫14日前まで	3回以内	ア	○	○	
K	ラリー水和剤	2,000倍[150～300L/10a]	収穫7日前まで	3回以内	3回以内	○		
I	ロブラール水和剤	1,000～1,500倍[100～300L/10a]	収穫14日前まで	3回以内	4回以内 ^{*3}		○	

B：有機硫黄剤、E：有機塩素剤、I：ジカルボキシイミド系剤、J：コハク酸脱水素酵素阻害剤（SDHI剤）、
K：ステロール生合成阻害剤（EBI剤）、S：QoI剤（ストロビルリン系剤）

*1：粒剤は1回以内、水和剤は4回以内

*2：土壌灌注は1回以内、散布は3回以内

*3：種子粉衣は1回以内、は種後は3回以内

※同一符号は同一成分が含まれていることを示す。（ ）内は各成分の総使用回数を示す。

ア：マンゼブ（3回以内） イ：シメコナゾール（3回以内（は種時は1回以内））

アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる薬害を生じる場合があるので、散布間隔を2週間以上とする。

ストロビーフロアブルは浸透性を高める展着剤を混用すると薬害を生じる場合があるので、展着剤の加用に当たっては、その適否を確認する。

分類S、K、I、Jは、耐性菌出現回避のため連用を避ける。

【 問合せ先 】

秋田県病害虫防除所 TEL 018-881-3660

秋田県農業試験場 TEL 018-881-3326

掲載HP <https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>